見えない日常を学ぶ―アイマスク体験を通して―

↑アイマスクをしてキャンパスの周辺を移動

↑キャンパス内の階段の上り下りを体験

↑手引きしてもらいながら食事を疑似体験

目の見えない方の日常生活を体験するため、アイマスクと白杖を使用し学内外を歩く体験講座が10月29日（土）に神田キャンパスで障害者支援団体NPO法人ホープの指導のもと行われた。学生と教職員の10名が参加した。

参加者は2人1組となり、アイマスクで視界を塞いだ役とそれを介助する役を交互に体験。学内外の歩行では、アイマスクをつけた人に対して介助役が、段差や障害物がわかるように声掛けしながら移動していった。そのほか、トイレでの介助や食事の疑似体験も行った。

参加した大坪愛実さん（法1）は、「アイマスクをしての移動は想像以上に怖かった。誘導する人が、段差や障害物をしっかり伝えないと危ない。伝えることの大切さを感じた」と話す。見えないことを体験することで、どのような支援が必要とされるのか理解を深めたようだ。

主催の障がい学生支援室では、このほかにも手話体験講座や視覚障がい理解講座などを開催している。

伝え合うことで、互いの偏見はなくなる

講座にゲスト参加した全盲の永盛楓人さん（法4・写真）は、専修大学では大学職員や学生団体ピアサポーターの支援で、不自由なく大学生活を送れていると語る。

「専修大学は支援が行き届いてると思います。教職員のサポートはもちろん、ピアサポーターの学生もごく自然に手引き（視覚障害者の案内）してくださるため、日々ありがたいと感じています。

授業でのサポートとしては、配布資料やパワーポイントデータなどの視覚資料を、ピアサポーターが文字データに変換する作業（テキストデータ化）をしてくれるので、そのデータを点字に変換したり、音声読み上げ機能で音声情報にしながら受講できています。

また、ピアサポーターとして、障害当事者目線で大学内の障壁を解消する活動にも取り組んでおり、学生食堂に優先席を設置するプロジェクトにも携わりました。

大学では友達がたくさんできました。ピアサポーター以外の学生も、何か困ってますかって話しかけてくれます。見えることがどういうことで、逆に見えないことがどういうことなのか、互いに伝え合うことで偏見はなくなると思います。理解し合い歩み寄ることが何よりも大切だと考え、大学生活はもちろん日々の生活を送っています。」